

【執筆者の紹介】

早川定雄氏は、昭和十九年十一月に、海拉爾第三六二部隊に入隊した。初年兵教育は暗号であった。第三六二部隊の大半は陣地を構築するため興味安峰に行つたが、早川氏は留守部隊に残つた。ソ連参戦で海拉爾で空襲に遭い、そのまま四日四晩、眠ることなく興安嶺から博克図まで歩き、博克図から東滿に応援する列車に乗つたが、途中、哈爾濱で終戦を迎えた。

香坊で武装解除し、牡丹江収容所まで歩き、三か月後の十一月、無蓋車に乗り入し、昭和二十二年五月二十六日に帰国した。

全抑協には五十五年にも会員となり、五十九年より山口県の事務局長となり、会の運営に努めた。特に、慰労金等の申請事務については、暑さにもめげず、山口県の全会員の申請業務に尽くした。これまでの彼の尽力には深く感謝している。

(山口県 瀬来 明登)

私の抑留

岐阜県 木村 秀雄

昭和二十年八月九日、突如ソ連軍は日ソ不可侵条約を一方的に破棄して満州に侵入してきました。装備は劣勢なれど敢然とこれを迎え撃つも、我に利あらず遂に八月十五日敗戦、無条件降伏となりました。

そして我々は牡丹江に集結、武装解除を受け帰郷の日を待ちました。しかし、それは余りにもはかない夢でした。

国際法もボツダム宣言も無視して、実に六十万七七十万人の兵を捕虜として酷寒のシベリア各地に抑留して銃剣と鞭のもと重労働を強制し、零下四十度の広野で寒さと飢餓と病と戦いながら、ノルマ、ノルマ、ダバイ、ダバイと人間としての自由を剝奪され、牛馬のごそく酷使された。疲労困憊、病魔に冒され、故郷の妻子の名を呼び続けながら死の旅立ちをした戦友たち

の姿が脳裏に焼きついて離れません。

戦争が終結してなお続いた捕虜生活は一幅の地獄図であり、多くの戦友たちがいまなお酷寒のシベリア各地で捨てられ、眠っていると思うと悔恨の気持ちでいっぱいであります。

昭和二十年十月末日ころ、牡丹江を貨物列車に乗り出発する。そのときは、皆帰国できるものと思っていた。列車内は真ん中に入口がある有蓋車で、二段ベッドになっていて、中央にストーブがあり、その上で飯炊きをする。食べ物は満州より持ち込んだコーリヤンである。便所はトタンばりで床に穴をあけた簡単なものである。

最初のうちは太陽の位置で北に向かっているのでウラジオストック方面に行くものと思っていた。しかし何日かして西の方面に進んでいるのがわかりました。これは間違いないシベリア行きであると、一同帰国はうそであるとわかり観念しました。

何日か後、バイカル湖の見えるところへきたとき、全員列車より降りました。そのとき、我々を輸送して

きたソ連の将校が、皆さんにうそをついてきて申しわけない、軍の命令でシベリアで働いてもらうために連行した、あしからずと話してくれました。そのとき、十年くらいは帰れないと覚悟をしました。彼らは日露戦争の仇討ちだと言っておりました。

バイカル湖がいかに広いか、地図で見ると長さ青森と大阪、幅は仙台と新潟ぐらいあり、まるで海のようにでした。その湖畔を列車で三日もかかり、いかにソ連が広いか驚きました。

列車に乗ること五十日くらい、アフガニスタンかタシケントの北あたり、ロフソフカというところに到着しました。広い土地の中に赤色をした曲がりくねった川がありました。地図でさがしても見当りません。

収容所に日本人が約二千人ぐらい収容され、三重に巻かれた鉄条網の中に監視所が四か所あり、逃げることはできそうにありませんでした。

私のソ連での第一回目の職場はトラクターの製造工場でした。我々全員を裸にして女医が尻の肉つきを見て、重労働と軽作業に分けられたのです。私は小柄の

ため軽作業の方に回り、鑄型の針金切りで比較的楽でした。

重労働の者はソ連女性の下働きで重いものを彼女たちのところに運ぶ作業でした。作業がきつくて毎日、四、五名ぐらいつ倒れてしまいました。(栄養失調です)

そんな作業が約六か月くらいつづきました。二十一年の四月ごろでした。夜中に石炭おろしに駆り出されました。有蓋車で真ん中に戸があるだけの車で、朝までに全部おろせとのノルマでした。

私は朝方遂に倒れてしまい、収容所に担ぎこまれました。私を意識がなくなるとき「兄貴助けてくれ」と叫んだそうです。一週間か十日ほどで気がついたら、戦友たちが足の方にはレンガを暖めて入れてくれ、頭には雪をのせて冷やしてくれておりました。そうした戦友たちの介抱のおかげで命が助かりました。友情に感謝しております。

軍医が来て発疹チフスと診断され隔離病院に収容されました。しかし、病気になること家のことも字も忘れ

てしまい過去を忘れた人間になっていました。今でも名前を思い出せず失礼することが間々あり、帰国した当初はばかになったと評判でした。その後薄紙をはぐように正常になりましたが、一時はどうなることかと家族一同心配したそうです。

病院でのことを少し書きますと、当然のことながら病人ばかりで、誰も自分のことではいっばいで助けてくれません。発熱患者ばかりで、ある人は背袋を負って家に帰ると言って外に出て撃たれて死んだ人。口が乾いて雑巾水を飲む者。水を飲むと、体の中で発疹が出て血便が出てとまらない人。今まで話をしていたのに、既に亡くなっている、貧血のため眠るように死んでいきます。

私は気がついていたので水は飲まず沸かした湯しか飲まず、ソ連には青いトマトの漬物があり、そればかり食べて体力をつけました。頭の毛は抜けてしまい、爪は柔らかくなってしわしわになりました。

そのうちにすこしずつ一皮、一皮がむけるように思ひ出し、生き残った実感がわいてきました。

そのうちに退院できる日がきました。そのときはほとんど全員に伝染して兵舎の全員が病人ばかりとなり、収容所全部が病院のようになり、所長は責任をとって首となったそうです。

私は早く元気になりましたので、死体確認の係となりました。毎日、二十五〜三十名くらい運ばれてくる戦友の被服を脱がせ裸にして、小屋の中にごぼう積みにする作業でした。

なぜ裸にするかという点、シラミがたかかって体が冷たくなると最後に腹に全部集まってくるので、彼等は毛シラミと勘違いして裸にするのです。

そのうちに私を看護して助けてくれた戦友たちが次から次へと運ばれてくるので、まことに申しわけなく、私の下着と彼の下着を取替えました。三名まででした。これを着て故郷に帰ってから戦友の奥さんに本人のものとなる遺品として届けましたが、あとは交換するものとして毎日毎日が地獄でした。三人に一人しか生き残らず、なんとか岐阜県の友だけとは思ひ、名前と日付と場所を書きとめておきました。

私は一兵卒のため身体検査はきびしくなく、服に縫い込んで帰国後県に報告しました。約六十名の氏名です。五月ころになると馬車に死体を乗せて運び、何人か一緒に埋葬しました。残った者は各地にばらばらに分かれ、誰がどこに行ったのかわかりません。

収容所は閉鎖され、工場作業はやめになり、どの町か不明ですが、戦友も変わり二軒続きの立派なレンガづくりの家の作業になりました。日本人で大工、左官の経験者とソ連の職人とともに建築作業です。二年の夏ごろのことです。彼らは人種差別はしないで仲よく共に働くことができました。

そんなある時期、私と友人二人で家の前に噴水をつくることを監督に命令されました。幸いにも私は多治見工業学校、友人は瀬戸窯業学校出身でしたので、これはお手のもの、私は彫刻、彼は絵画でイタリアの小僧の噴水をつくることにしました。

我々二人だけ別の小屋を与えられ作業にかかりました。監督には早くはできないと納得させて、余暇に額をつくってソ連の民間人に売ることになりました。

天井に石膏をつかわずに型をつくり、何枚でも石鹼で起こし、彼が繪付をして、友人たちにかくれて売らせ、または物々交換をして大変に助かりました。

監督初め労働者たちは、作業の終わるころ囲いの外に建築材料をだして置き帰るときに、それを持ち帰り自由市場で色々のものと売買しておりました。そのため資財が三倍くらいはかかると思いましたが、資財は国有であり、そのくらいの自由は黙認していたようです。

二十二年の夏、暖かくなってきたら天井の壁が落ちてきてしまい（凍っているうちはついていた）監督も首になり、噴水も未完成で終わり、助かりました。生きるための手段とはいえ、今から思えば随分種々なことをやりました。

次に、またまた少数人数になり約五十名くらいで建築作業に出るようになりました。その頃のことです。日本新聞が発行され、日本人に共産主義の洗脳が始まりました。私も選ばれて委員長になり勉強をしました。

ソ連に人種は約百二十数種くらい、共和国は十五。

当時の党员は約二百万人くらいで、人口の％に過ぎません。秘密警察のような働きで、軍隊の内部、職場の内部でだれが党员であるかわからない。給料は同じでもほかに物の支給があるように見えました。上の者も下の者も通報で刺されるとすぐに監獄行きです。ユダヤ人は頭がよいので高等教育が受けられますが、一般の人は小学校四年までで、大工は大工、左官は左官で一生職場を変わることはできません。

私は運転手の助手となり町に出ていくことができるようになりました。そのような毎日が続く日、時々彼の家の前になるとバラ積み荷物を上より投げ捨て、平気でした。これをバザールに持って行って売るので、ともかく運転手は最高の生活でした。またペーチカづくりを監督したこともありました。彼らは図面を見ることができないため、私が教えてやりました。図面が一段一段上まで書いてある、レンガのあるところ、ないところが書いてありました。

また、今の日本にあるサウナ風呂をつくりました。彼らは石を焼いた上に水をかけて蒸気を風呂の中に入

れ、中に階段をつくって上の方ほど暖かく、毎日入って楽しい年でした。

二十三年の夏の演習場の兵舎作りをしましたとき、作業中に釘が目当たり白目が切れたので見えないと言って（本当はその場で見えたのです）作業はやめて包帯をして風呂たきの毎日でした。ある日、渡河演習がありました、川が増水して船を浮かべたとき、橋が流れて兵隊が川に流されたのですが、そのとき身を挺して飛び込んだのが共産党員であったのは驚きました。

二十三年の夏も終わるころ、本年最後の船で体の弱い者だけ帰国できることになり、私が隊長となり約五百名くらいの戦友とともに汽車でナホトカに向かいました。途中二回ばかり降ろされて、九月の中ごろやっと帰国できることになりました。

二十三年九月二十三日信濃丸に乗船して、初めてやっと祖国に帰るとの実感がこみ上げて涙がとまりませんでした。箱庭のような故国の風景は苦しいシベリアの自然とはまるで別世界でした。

船上より島が見える、暖かい緑色の竹藪が見える、その前に小さな畑があり、遠くの花々がかすんで見えて感無量でありました。

舞鶴に上陸、船の中で私が前に共産党の委員をしていたことを口止めしてありましたので、一人も本当のことを言わなかったため助かりました。

舞鶴に上陸と同時に家に電報を打ちましたが、一週間いる間に家から返事が来ないので、家に何事かあったと思い、夜の列車です、岐阜駅に降り友人の家で世話になろうと考えておりましたら、関が原付近でようやく家よりの電報を受け取りました。それによると名古屋駅で家の者が待っているとのことで安心しました。

入隊するとき二百円持っていました、当時としては大金でした。それが舞鶴で九百円を支給され、喜んだのも束の間、カンパンとさつまいもを買ったら終りでした。通貨の変わりようにびっくりしました。夜中に名古屋駅に到着、名古屋より遠くに帰る戦友たちが下車、一人一人とかけた握手をして喜んでわかれ

たことをつい昨日のようになつかしく思い出しております。

【執筆者の紹介】

岐阜県土岐市土岐津町高山八五の一、木村國一氏の長男として、大正三年三月十八日出生される。

昭和二年四月、土岐市泉尋常小学校卒業。

昭和六年四月、岐阜県立多治見工業学校卒業。

昭和十三年五月より父親の事業、陶磁器製造業を引き継ぎ、その後事業は急速な発展をして、会社組織として拡大の一途をたどる。

その間、娘三名を得て幸福の極みであった。

そのうち日本の戦局急を告げ、木村氏にも召集令状が届き出征される。

そのとき、奥さんの腹の中に、五か月の男児があった。内地で集結、渡満される。

昭和二十年八月十五日終戦、九月シベリア抑留。

昭和二十三年九月十九日復員、なつかしの郷里へ帰る。

昭和二十三年、推されて弱冠二十七歳で土岐津町会議員に当選。同年、土岐市合併と同時に土岐市議会議員、二期務められる。

その間、厚生委員長、建設委員長を歴任する。

昭和四十年、岐阜国体開催のとき、土岐市下石町の会場にて昭和天皇、皇后両陛下の先導役としてご案内され、一世一代の大仕事を無事に果たして大任を務めた。

その他、ローターの土岐市会長を務めるなど多くの公務を果たされた。現在、土岐津町高山老人会長を六年努めて皆さんに親しまれている。

(岐阜県 鈴木 善三)

月見草の花咲く丘

熊本県 徳 永 年 春

ナホトカよさようなら

乳色に流れる霧を押し分けて、銀色に輝く海のはと